

関宿の歴史

関宿の最盛期は、町が江戸と京都を結ぶ東海道 53 宿場の 47 番目の宿場として栄えた江戸時代（1603-1867）でした。1843 年の時点で、関には大名や公家、幕府役人が泊まる大旅籠（本陣）が 2 軒とそれより少し身分が低い人が泊まる補助的な旅籠（脇本陣）が 2 軒、そして、普通の旅籠が 42 軒ありました：普通の旅籠のいくつかは数百人の旅人を泊められる規模でした。

この町は、鈴鹿山脈が急峻な自然の防壁を形成している古来の東日本と西日本の境界上に位置し、東海道と巡礼者たちを南方の伊勢神宮へと誘う街道との分岐点にあたります。そのため、関宿は将軍徳川家康とその後継者たちが、幕府の置かれた江戸と地方を結ぶ五街道を建設するより千年近く前から、すでに重要な場所でした。

関宿の西端にある関地蔵院は、741 年に奈良の東大寺建立において中心的な役割を果たした行基（668-749）という仏僧によってこの町を天然痘から守るために建立されました。関地蔵院の地蔵像は日本最古であり、お地蔵様に前掛けを着せる風習（お地蔵様は子どもの守護者として崇拝されています）もこの場所が発祥とされています。それどころか、この町はもともと「地蔵」が入った「関地蔵宿」という名称で呼ばれていました。「関」という地名は、奈良時代（710-794）に天皇が住む都と周辺地域を守るために設けられた 3 つの関所のひとつで、この町の西端に置かれていた「鈴鹿関」に由来します。「宿」とは宿場町（post town）のような宿泊可能な場所を示す字です。

平安時代（794-1185）、歴代天皇は日本最古の神社である伊勢神宮に参拝する際、関宿を経由するようになりました。時代と共に、巡礼地としての伊勢の人気は高まり続け、江戸時代には年間数十万人が訪れるようになりました。

関は現在も交通の要衝であり続けていますが、だいぶ前にこの地域の交通施設が整備されてからは、旧東海道を通る歩行者や車両の大半はそちらを利用するようになりました。皮肉なことに、そのおかげで、関宿は保存地区の指定を受け建造物の修復と復元に注力し始めた 1984 年の時点でも素晴らしい保存状態で保たれていました。以降 40 年にわたる努力の甲斐あって、現在関宿では、江戸時代から明治時代（1868-1912）にかけての面影を色濃く残す約 400 棟の建物が約 2 キロにわたって並ぶまちなみを見ることができます。